

## 謝 辞

本研究を博士論文として提出するところまで、なんとか漕ぎつけることができた今、学恩の深さを身に沁みて実感している。簡単にではあるが、記して深謝したい。

まず、稚拙な本研究に対して懇切なコメントを頂戴した、論文審査委員会の波多野澄雄先生、赤根谷達雄先生、首藤もと子先生（以上、筑波大学）に厚く感謝したい。波多野先生には、学類生時代の独立論文から博士論文に到るまで一貫してご指導して頂いた。そもそも、大学入学以後、部活動に明け暮れる極めて不勉強な学生であった筆者が、学問の奥深さに初めて触れたのは、一年生三学期のときに受講した「日本政治外交史」の授業であった。「歴史を紐解くこと」の面白さを知った、あのときの感動がなければ、今こうして研究を続けていることもなかったであろう。また、赤根谷先生からはオーストラリア公文書館での史料調査についてもアドバイスを頂いた。調査に向かう前、先生から「オーストラリア公文書館は世界一」と聞かされて半信半疑であったが、キャンベラの公文書館で史料を漁りながら、先生の言葉を実感したのを思い出す。首藤先生には、本研究のみならず、学会発表や別の論文についても、実に丁寧なコメントを頂戴した。併せて厚く感謝したい。

筆者は修士時代の二年間、いわば武者修業として早稲田大学大学院アジア太平洋研究科を学び舎とした。指導教官であった後藤乾一先生（早稲田大学）からは、「日本」外交史の視点に偏重することなく、「アジア」側からの視点を忘れることのないようにとのコメントを幾度となく頂いた。本研究を書き進める間も、先生の言葉をしばしば反芻したが、結果として、そうした視点をどれだけ取り込めたのかと問われれば、甚だ心許ない。やり残しの「宿題」として、今後の課題としていきたい。

二つの大学院を経験したことは、多くの先生の知見に触れることができたという点で、筆者にとって大きな財産となっている。すべての先生の名前を記すことはできないが、とくに、池井優先生（元慶應義塾大学）、入江昭先生（ハーバード大学）、岩崎美紀子先生（筑波大学）、宮本邦男先生（作新学院大学）からは、学問的地平線の広さ・深さを教わった。

佐藤晋先生（筑波大学非常勤講師）からは、研究対象が近いこともあり、常に知的刺激を受けている。先生には日本国際政治学会・日本外交史分科会（2003年10月、於つくば国際会議場）で、筆者の報告に対する討論者を務めて頂いたばかりか、論文審査にまであたって頂いた。また、本研究テーマについて貴重な批判とコメントを頂戴した池田・佐藤政権研究会や戦後日本外交史研究会、現代政治学研究会の諸兄にも厚く感謝したい。

本研究が描いてきた「アジア太平洋」のダイナミズムは、ほんの一断面にすぎなし、それも十分に描ききれたとはいえないだろう。まだまだ行き足りないところばかりである。学恩の深さを胸に、これからも一步一步、前を向いて研究を進めていきたい。